

特別展 「日系移民1世紀展」の教育プログラム

仲底 善 章

(沖縄県立博物館)

A Note of educational programs related with Special Exhibition
"One Century of Japanese Emigration-From Bento to Mixed Plate"

YOSHIAKI NAKASOKO

(Okinawa Prefectural Museum)

1はじめに

当館では本年度教育普及事業として、特別展開催の関連事業「教育プログラム」を初めて実施した。

従来、当館における「展示会」の関連事業は、講演会や各種の舞台発表など、来館者を対象とするサービスであった。「博物館の展示は、より多くの人々へ還元を！」をスローガンに実施すべきであると考え、様々に検討した結果、特別展開催の関連催事として、三つの教育プログラムを試みた。

以下当館が実施した教育プログラム実施について報告したい。

2教育プログラムの概要について

今回、当館が、特別展開催の関連事業として実施した「教育プログラム」は以下の3つである。

まず、1つめが特別展開催期間中の来館者サービスの、より一層の向上を図る目的の展示解説ボランティア養成プログラムの開催である。このプログラムは特別展開催3ヶ月前からスタートし、3回の学習会を実施した。展示会の趣旨をはじめ、展示資料一点ずつの理解、3回目の講義では実際に展示されている個々の展示資料を追いながら展示解説ができるようになるまでの知識を取得する学習プログラムである。

本プログラムの最大のメリットは、担当学芸員とボランティアが知識を共有し、互いの知識を補足する点にある。様々な疑問を投げ合うことにより、ボランティア自身が最初のモニター（来館者）になることは、学芸員にとっては大変有意義であり、展示評価を行う上でひとつの目やすを提示することになった。

2つめに教育機関とタイアップした指導者向けへの展示オリエンテーションプログラムの開催である。これは展示会開催前に、学校や社会教育施設等の引率者を対象に、展示会の意義・概要などを説明し、展示会に対する理解を促進するための館内スタディーツアーの実施である。

そして3つめには、小学校や中学校及び児童館・公民館などの社会教育団体と博物館が連携・協力して、それぞれの機関が目的とする教育内容に則した学習プログラムを立案する「教育プログラム」の実践である。

この「プログラム」では、①特別展「日系移民1世紀」の見学のためのプログラム ②博物館の有するさまざまな機能を、小・中・高等学校における「総合的な学習の時間」の活用例としてのプログラムの開発、③沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「総合的な学習」の場としてのプログラムの開発、の3つを試みた。

那覇市立城東小学校の6学年、総合的な学習の時間「国際理解：世界に広がるウチナンチュ」、那覇市立久場川児童館「迷路の奥に沖縄発見！」実行委員会、那覇市立大名児童館「特別展 日系移民1世紀展をみよう」である。

その他に、那覇市立石嶺公民館の依頼による「親子寺子屋講座：博物館の見学」の中でも、本教育プログラムを活用した実践を行った。

資料 1

特別展「日系移民1世紀」展 教育プログラム実施要領

1 目的

この要領は、ハワイ移民100周年記念特別展「日系移民1世紀展」に係わる教育プログラムで、博物館教育と学校教育の密接な連携を試みるためのものである。従来、博物館事業は、展示活動を中心とするものであったが、近年の地域学習や生涯学習の中で高まる社会教育施設としての多様な活動が求められている。

このたび、当館では教育プログラムの先進的な米国の全米日系人博物館の協力を得て、初の本格的な学校と連携した博物館の教育プログラムを実施し、展示のより一層の理解の促進及び展示の背景にある歴史的・文化的なものを含めた総合的な学習を試み。博物館と教育関係団体の有機的連携をめざす契機とする。

2 主催 沖縄県立博物館、全米日系人博物館

3 後援 那覇市教育委員会・金武町教育委員会・沖縄県小学校社会科研究会

4 方法

ハワイ移民100周年記念「日系移民1世紀展」の展示会を活用した授業内容とする。授業やその指導案作成については、当館学芸員と参画する各教育機関（小・中・高等学校及び児童館や公民館など）の職員と個別に行う。

授業は、事前学習・展示会学習・総括学習で構成し、所要時間は各教育機関の状況に応じて弾力的に設定する。実際の学習においては、当館学芸員及び当館教育ボランティアと各教育機関の担当者が連携を図り、児童・生徒の実態や学習内容に応じて様々な形のティームティーチングを試みる。

5 対象 小・中・高等学校などや児童館・子供会・学童クラブを対象とする。

6 期間 特別展開催期間中及びその前後

7 その他

当事業の推進にあたり次のことに留意する。

- ① 学習内容については、全米日系人博物館、森茂岳雄氏（中央大学教授）・中山京子氏（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）の協力のもと、当館教育プログラム担当者と当該教育機関担当者で個別に検討会議を設定し、指導案を作成するものとする。
- ② 児童・生徒の移動に関しては、それぞれの教育機関で対応していただく。
- ③ 事業終了後、反省会議をもち、実践報告書を作成する。
- ④ 本事業参加の児童・生徒の当館への入館については、入館料を免除する。

資料 2

特別展「日系移民1世紀」展 教育プログラム実施計画

1 主な内容

当館では特別展「日系移民1世紀」展を開催するにあたって、教育プログラムの先進的な米国ボルチモア市立博物館の協力を得て、本格的に学校と連携した博物館教育プログラムを実施することにより、展示のより一層の理解促進、及び展示の背景にある歴史・文化を含めた総合的な学習を進め、博物館と教育関係団体のさらなる相互活動を展開するため。

- (1) 特別展「日系移民1世紀」展の展示内容を活用した活動
- (2) 沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「総合的な学習」の場としての活動
- (3) 学校・社会教育施設等の引率者を対象とした「博物館スタディツアーア」の開催
- (4) 博物館職員と各教育団体職員によるチームティーチングを活用した指導方法の試み
- (5) 作成した教育プログラムは、実践報告書として、各教育期間等に配付する。

2 教育プログラム参加予定教育機関

那覇市立城東小学校、那覇市立首里中学校、那覇市久場川児童館

那覇市立石田中学校、金武町立金武中学校、沖縄県小学校社会科研究会

3 期 間 特別展開催期間中及びその前後

- (1) 各教育機関の実施についてはそれぞれの教育機関と調整して実施する。
- (2) 「博物館スタディツアーア」は11月5日（日）午後2：00～4：00で実施

4 実施方法

博物館職員と各教育団体職員によるチームティーチングを活用して行う。

- (1) 各教育機関施設内での事前・事後の主たる指導は当該施設職員が行う。
(但し、指導内容によってはこの限りにあらず)
- (2) 博物館内の指導は、博物館職員及び博物館教育ボランティアが行う。

5 役割分担

総括責任者……………前田教育普及課長

主担当……………仲底

副担当……………園原・太田

教育プログラム指導案の作成……………各教育機関担当者・仲底

※ 指導案作成に関しては、全米日系人博物館、森茂岳雄氏（中央大学教授）中山京子氏（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）の協力をお願いする。

教育プログラムに伴う児童・生徒の移動……………各教育機関

教育プログラムの実践……………各教育機関及び博物館職員
博物館教育ボランティア

教育プログラムの実施の反省……………参加教育機関の代表及び関係

する博物館職員

教育プログラム総括反省会……………仲底及び関係者

資料 3

「博物館スタディツアー」実施計画

1 目 的

社会教育団体の引率者を対象に、特別展「日系移民1世紀」展の事前の学習会を開催することにより、教育プログラムのより効果的な活用を図る。

2 主 催 沖縄県立博物館

3 後 援 沖縄県小学校社会科研究会

4 対 象 県内の小・中・高等学校の教諭や児童館や子供会等の社会教育施設の指導者

5 期 日 平成12年11月5日（日）

午後2：00～4：00

6 場 所 沖縄県立博物館

7 当日の日程

(1) 受付 午後1：45～2：00

(2) 開会式 午後2：00～2：10

司会（仲底）

開会のことば……前田教育普及課長

館長あいさつ……平田與進館長

(3) 博物館スタディツアー

午後2：10～3：50

教育プログラムの趣旨・別展の内容説明、

質疑・応答……園原外

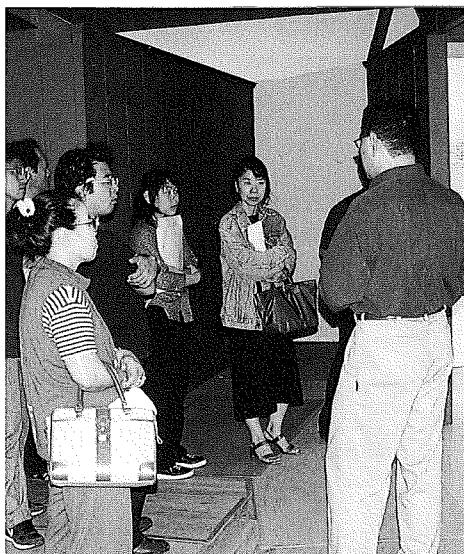
(4) 閉会式 午後3：50～4：00

司会（仲底）

閉会のことば……………前田教育普及課長

8 その他

本事業参加者の入館については、入館料を免除する。



博物館スタディツアー

3 教育プログラムの実践例

その1

展示解説ボランティア養成プログラム実施要項

沖縄県立博物館

博物館ボランティア会

1 目的

ハワイ移民百周年記念特別展「日系移民1世紀展」開催期間中の、来館者サービスのより一層の向上を図ることを目的とする。

2 内容

展示会開催前に展示会の趣旨理解、展示資料についての解説学習、実際の展示資料を追っての実践的解説プログラム学習を実施する。

3 日時

(1) 平成12年9月20日(水) 午後2:00~5:00

展示会の趣旨説明と展示構成

(2) 平成12年10月11日(水) 午後2:00~5:00

展示資料についての学習会

(3) 平成12年11月8日(水) 午後2:00~5:00

展示された資料を追って実践的解説学習

4 参加者 沖縄県立博物館登録ボランティア

5 講師 園原 謙 (移民展担当学芸員)

三木美裕 (全米日系人博物館教育部部長)

その2

教育プログラム

「迷路の奥に沖縄発見！」

久場川児童館：迷路づくり実行委員会

沖縄県立博物館

1 趣旨

本教育プログラムは、久場川児童館と沖縄県立博物館とが協力して行う事業である。

特別展「日系移民1世紀展」を機会に展示に関する教育プログラム「迷路の奥に沖縄発見！！」を実施することによって、博物館の有する機能を積極的に他の教育機関に利用して頂き、今後の博物館活動の指針とする。

2 協力機関

沖縄県立博物館、那覇市立久場川児童館、沖縄県立博物館ボランティア会

3 実施期間 平成12年11月5日（日）～平成12年11月26日（日）

4 内容

久場川児童館が企画する、「久場川児童館ふれあい体験事業・迷路づくり」に、今回の特別展「日系移民1世紀展」や常設展の自然史室及び民俗室の展示を生かす、学習プログラムとする。

5 参加者 久場川児童館：迷路づくり実行委員会委員 玉那覇有和外9名

職員 真栄城恵子館長外3名

沖縄県立博物館：仲底善章、伊波悦子、柏木祐

：沖縄県立博物館ボランティア会

6 主な日程

11月5日（日）午前10:00～11:30

迷路づくりのイメージづくりのための

事前学習のスタディツアーボーク：博物館

11月11日（土）午後4:00～

迷路のイメージづくり：久場川児童館

11月12日（日）時間は後日調整

迷路づくりの資料収集の為の特別展見学
：県立博物館

11月13日（月）～11月22日（水）

迷路づくり、必要に応じての特別展見学
：久場川児童館・県立博物館

11月23日（木）～11月26日（日）

迷路探検ツアーボークの開催：久場川児童館

12月2日（土）

迷路づくり総括反省会：久場川児童館

7 その他 實行委員の特別展見学について

は、教育プログラム参加者扱いと
し、無料とする。

実施状況

久場川児童館が実施する「迷路づくり」に、博物館の担当者も企画・立案の段階から関わり、県立博物館が有する写真・パネル資料を提供した。また、迷路も博物館の展示手法



迷路探検ツアーボークの参加者

を生かすような工夫をした。ダンボールで迷路をつくる作業に計画よりも時間がかかってしまった。バザーなどの出店も行ったので2000名余の参加者を得ることができた。

成果と課題

(1) 成 果

- ・博物館の特別展開催準備と同時進行で行ったが何とか予定どおりの日程で実施することができた。
- ・博物館資料を活用することによって「迷路」がより明確なテーマをもった内容にすることができた。
- ・博物館と連携した活動を、今後とも実施するための手がかりを得ることができた。

(2) 課 題

- ・博物館の年間事業計画と連動した学習プログラムの企画・立案の為に、お互いが継続的な話し合いを続けること。
- ・2つの館がこれまでに築き上げてきた成果を生かしたプログラムづくり
- ・体験用に貸出ができる博物館資料の更なる充実。
- ・担当者のみでなく、全職員で対応できる組織づくり。

その3

教育プログラム

「総合的な学習の時間」実施計画

那覇市立城東小学校6学年

沖縄県立博物館

全米日系人博物館

単元名 【世界に広がるウチナーンチュ】

1：単元の目標

- (1) 「移民の学習」を通して、わたしたちの暮しが世界の人々と深く結びついていることに気づかせ、同じ地球に生きる人間として、協力し合って生活することの大切さを理解させる。
- (2) 博物館での見学を通して、自分の学習課題について、自ら進んで学ぼうとする態度を身に付けさせる。
- (3) 博物館を活用した恒常的な「学習活動」の機会とする。

2：単元について

(1) 教材について

県立博物館において実施される、特別展：ハワイ移民100周年記念「日系移民一世紀展」を機会に、「博物館の見学」を取り入れた学習を展開することによって、「博物館の活動」について、理解を深め、学習の場としての博物館利用の仕方やマナーについて学習する。

本単元を通じて、「総合的な学習の時間」における博物館利用の仕方を児童・生徒が主体的に学ぶ方策を探り、博物館と各教育機関が日常的に交流する機会とする。

単元指導の際には、博物館職員と各教育機関が連携を取り、児童の実態や学習内容に応じて、様々な形のチームティーチングを試みたい。

(2) 児童観について

城東小学校6年生は、遊びに関してはとても明るく行動的である。しかし、学習になると消極的で指示待ちの姿勢が多く見られ、「自ら課題を持ち、積極的に課題を追求し、発表する力」が備わっているとは言えない。

保護者へのアンケートでも「追求する力、発表する力が少ない気がする。」という意見があがっている。

そのことから学年目標に「しっかりと判断して行動する子」を掲げ、日々の生活の中で自ら問題意識を持つよう指導を進めているところである。

地域に見ると、県立博物館・石嶺公民館、首里図書館などの施設には恵まれているが利用することがあまり見られない。

そこで今回博物館で行われる、特別展「日系移民1世紀展」を教材にすることにより、地域にある施設を活用して、課題追求する力を児童に身につけさせていきたい。

また私たちの沖縄が、地理的にも文化的にも世界でどのような位置にあるのかを学習して行く中で、「自らの問題意識を持ち、課題を追求していく態度」を養う。

(3) 指導観

本単元の指導においては、体験的な学習や問題解決的な学習を通して主体的に課題をつかませたり、物や人と積極的に関わっていく中で、自己の学習課題に深く追求し、追求の楽しさを味わせたい。

イメージの段階では、「総合的な学習の時間」が自分の追求したいこと＝学習課題を自分で見つけ、友達や回りの様々な方、地域にある様々な施設＝図書館（学校、那覇市・沖縄県立）や博物館等の社会教育施設、インターネットなどの通信情報システムなど活用して、学習が進められることを理解させる。

また、グループに分かれて過大に沿って追求の方法や調べたことの発信の仕方を話し合わせ学習計画を立てさせる。そのことによって、ひとり一人の活動が明確になり、主体的な行動ができるようになる。

出会いの段階は、博物館で行われる特別展「移民展」の見学を通して、各自で学習課題を見つけ、課題追求への見通しや学習方法について理解を深めさせる。

追求の段階は、グループや各自で自分ができる学習方法で、それぞれで課題追求することになる。この段階では、個々で時間確保をして、調べ活動に入ることになる。

この場合、教師集団のみでは対応することができなくなるので、父母や地域の人材を活用しての活動ができるような学習環境の整備が重要になってくる。

発信の段階では、それぞれの学習課題にとって一番良い発信はどんなふうに行えば良いかを検討し、より有効的な方法で発信できるように工夫をさせる。

まとめの段階では、各自が調べ体験したことを中心にまとめ、次への継続につながるような学習への見通しを持たせていくたい。

3：実施機関

沖縄県立博物、那覇市立城東小学校6学年、全米日系人博物館との共催とする。

※ 本教育プログラムによる博物館見学及び引率者については無料とする。

4：実施期間 平成12年11月17日（金）～11月30日（木）



三機関による指導案検討会



発表の為の準備

資料 1

5 : 単元の計画

指導総計時数 (15時間 : 総合 9 時間・社会科 6 時間)

過程	時数	学習活動	学習者の意識の流れ	備考
イメージ	(1)	オリエンテーション <総合的な学習の時間>について <移民>について学習しよう	・どんな学習をするのかな。 ・早くやってみたいな。	学年全体 (視聴覚室)
出会い	(4)	「課題探し」→ 博物館の開催される特別展「移民展」で見つける 2 <自分が調べて見たいことを見つけよう>	・どれが自分にとって一番よい学習課題かみつける。 ・面白いネタはないのかな。 ・博物館ボランティアに質問しよう	(城東小,博物館) 博物館で見学 博物館利用のマナー 博物館ボランティア活用
	1	<自分の課題>を発表しよう <課題に添ったグルーピング> <グループ課題を見つめよう>	・しっかりした自分の課題を持つようにする	各クラスで 学級内での編制無理 は学年室へ集合
	1	<学習方法を調べよう> ・調査の方法、対象や場所について ・アポの取り方について	・学習方法を理解し、実行できる手立てをきちんと考える。	学年プールでの実施 同一内容の課題別グループで行う
	課外	「課題追求をしよう」 追求① <調べる> ・博物館や図書館で ・インターネットの活用 ・身近な祖父母などから	・自分たちで出来るあらゆる方法を使って調べる。	・グループ別に調査活動を行う。 ・個人で行う (内容によっては)
発信	(4)	<まとめる>	・調べたことをわかりやすくまとめ、発表できるようにする。	・グループ別にまとめる
	2	(2) 1 <見てもらう=中間発表> ・各学級で発表する。 1 <見せせる=最終発表> ・学年全体で発表する。	・自分たちの調査にも役立てられるようしっかりと聞こう。	
追求	課外	「課題追求をしよう」 追求② <再追求すべき課題を整理する> <調べる> ・以前の調査計画を参考しながら調査を進める。 ① <まとめる>	・自分たちで出来るあらゆる方法を活用して調べる。 ・調べたことをわかりやすくまとめ、発表できるようにする	※課外活動として実施する。
	(2)	(①) (②) 「報告の準備をする」 「報告会をする」 3学期 社会科		学年全体の場での発表会を行う。
まとめ	(①)	「学習のまとめをする」 3学期 社会科		

資料2 ：実際の指導

平成12年11月19日（日曜日）10:30～12:30

城東小学校 6学年：校内及び博物館

指導者：各学級担任、前田・園原（博物館職員）

1：活動名　自分の「学習課題を見つけよう」

博物館ボランティア

2：ねらい ① 特別展「移民展」の見学を通して、学習課題を見つけさせる。

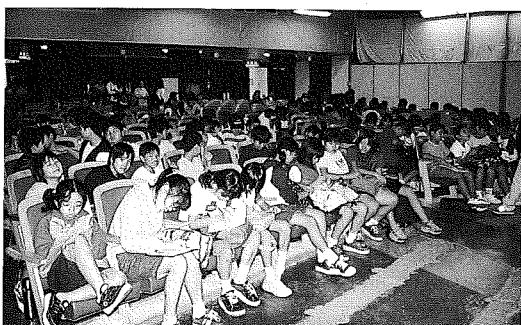
② 「学習課題解決」について、見通しを付けさせる。

3：活動場所 県立博物館

4：本時の展開（2～3／15）

過程	学習者の活動	支援・評価
事前の活動	1 学年集会 テーマ「博物館へ行こう」 ・諸注意 ・博物館へ向けて移動	指導者：学年主任、各担任
イメージ	2 学習のめあてを確認する。 ①移民展の見学で「学習課題」を見つけよう	指導者：前田（博物館職員）
追求	3 見学に際してのオリエンテーション ・学習の予定と内容 ・見学の際のマナーについて ・博物館ボランティアの活用について	
まとめ	4 各自分で「学習課題」を見つける為の見学 ☆ 1階は全米日系人博物館の資料展示 ☆ 2階は「沖縄の移民」関係の資料展示	指導者：各担任（上里 比嘉 平良 豊見山） 博物館職員 博物館ボランティア
	5 各自の「学習課題」について見通し付け、まとめる。 ☆ 補則説明 ☆ 次時予告	指導者：学年主任（上里） 園原（博物館担当職員） 新垣誠（日系人博物館コーディネーター） 指導者：学年主任（上里）

5：評価（省略）



講堂での学習



体験キットに挑戦

資料3 ：実際の指導

平成12年12月4日（月曜日）2～4校時

城東小学校 6学年：2校時 6-1 3校時 6-3

4校時 6-2 5校時 6-4

指導者：各担任、仲底（博物館職員）

ゲストティーチャー：森茂、中山

1：活動名 各クラスで、協力して調べた事を発表する。

2：ねらい ① 相手にわかるような発表にする

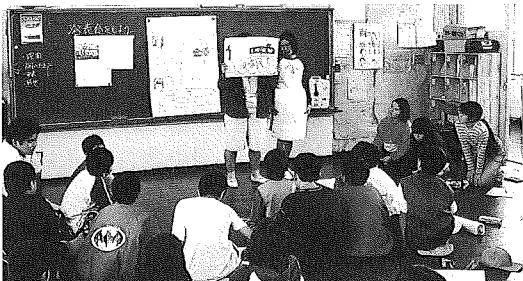
② 発表をよく聞き、自分たちの発表に役立てるようとする。

3：活動場所 各教室及び学年室

4：本時の展開（8／15）

過程	学習者の活動	支援・評価
イメージ	1 学習のめあてを確認する。 ① グループ課題に応じた発表をする。	指導者：学年主任、各担任
発信	2 調べたことを効果的に発表する。 (1) 発表の方法 ・ 壁新聞で、 ・ ビデオをつかって ・ OHPを使って (2) 分担に従って効果的な発表にしよう。 3 発表に対する質問をしよう。 ・ はつきりした明確な質問内容にする。 ・ 回答も具体的に答える。 ・ 答えられないものについては、後日答えるようにする。 4 学年全体で発表するグループを選ぼう。 ・ 多数決で選ぶ	・ 役割を明確にして、発表にする。 ・ はつきり聞き取れるような声の大きさで発表しよう。 ・ 他のグループの発表しっかり聞く ・ 互いに支え合って発表しよう。 (グループのメンバーの特技を生かす発表をする。)
まとめ	4 学習のまとめをする 次時予告 学年発表に向けての、準備を指示する。	

5：評価（省略）



学級発表会



学年発表会

資料4

6：授業記録

(1) 6の1での記録 司会進行は進行役の児童2名が行う。

教師は補足指導に当たる。

各グループの発表内容

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ① 移民をした人々と遊びについて（男5名） | ② 当山久三と移民（女3名） |
| ③ 戦争中の移民のくらし（女2名） | ④ 世界に広がった移民（女2名） |
| ⑤ 移民をした人々のその後（男3名） | ⑥ 移民をした人々のくらし（女4名） |
| ⑦ 移民について（女3名） | ⑧ 移民と三線（男5名） |
| ⑨ 移民と昔の道具 | ⑩ ハワイの学校 |

(2) 6の2での記録 司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

- | | |
|-------------------|-----------------|
| ① 移民とその理由（男3名） | ② ハワイ移民の仕事（男3名） |
| ③ 沖縄からの移民（女3名） | ④ 移民の苦労と喜び（女4名） |
| ⑤ 移民先の国（女2名） | ⑥ 移民の仕事（女4名） |
| ⑦ 移民の理由（女4名） | ⑧ 1世移民の苦労（男1名） |
| ⑨ 移民をした遊びと道具（男4名） | ⑩ ハワイ移民と宗教・文化 |

(3) 6の3での記録 司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

- | | |
|-----------------|--------------------|
| ① ハワイへの移民（男5名） | ② ハワイ移民の歴史（男1名） |
| ③ 移民の数について（男1名） | ④ 移民のくらし（男5女5名） |
| ⑤ ある女性の移民史（女1名） | ⑥ 戦争中の日系人のくらし（男1名） |
| ⑦ 移民新聞（女2名） | ⑧ 移民の理由・条件 |
| ⑨ 移民と昔の道具 | ⑩ ハワイの学校 |

(4) 6の4での記録 司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

- | | |
|-------------------|-------------------|
| ① 移民をした人のくらし（女4名） | ② ハワイ移民の暮らし（女2名） |
| ③ ハワイ移民について（女2名） | ④ ブラジル移民について（女4名） |
| ⑤ 移民と人々の考え方（女2名） | ⑥ 移民先の子どもの遊び（男2名） |
| ⑦ 戦争中の移民（名） | ⑧ 日系人移民と暮らし（男4名） |
| ⑨ 移民と人々の暮らし | ⑩ キックボードについて |

7：本時の総括

成 果

- 自分なりの課題を設定して調べることができた。
- 非常によく調べている。

課 題

- 発表の為の時間は少ない。
- 自分たちで独自に調べた内容が少なかった。（資料の引用が多かった。）
- せっかくの調べた成果が発表としてまとまっていない。（まとめる時間の確保）
- 発表の為の訓練不足（聞こえるような大きな声、正面に向いての発表）
- 自分の言葉でまとめ発表する必要性（引用資料の原文のまま）

8 成果と課題……総括会議の中から

(1) 成 果

- ・ 子どもたちが個々に自分の学習課題を設定して、調べることができるか心配であったが、子どもたちは自分なりの課題を設定して活動をすることができた。
- ・ 修学旅行や達成度テストと非常に厳しい期間中にも関わらず、子どもたちは放課後等や休み中に博物館や図書館等校外へ出ての調べ活動によく頑張ってくれた。
- ・ 「総合的学習の時間」での学習の仕方を子どもたちなりに理解し、活動することが出来、今後の「総合的学習の時間」活動に見通しを付けることができた。
- ・ 自分たちでテーマを設定して学習することに楽しさを子どもたち自身で感じ取ることができた。
- ・ 新聞、博物館・図書館やインターネットなどの様々な方法で自分たちが調べたいことをについて情報を集めることができるようになった。



ゲストティチャーからの学習

(2) 課 題

- ・ 子どもたちがゆとりをもって活動できる時間を設定すること。まとめる段階から発表までの期間を1週間ほどは確保すべきであった。
- ・ 調べたことの発表=発信の方法がこれまでの壁新聞による方法からまだ脱皮できていない。
- ・ 調べたことわかりやすくまとめることと、発表することは根本的に異なる事が児童自身に理解させることができなかつた。(発表には時間的な制約があるので1つまたは2つほどに的を絞って行うことなどの指導。)
- ・ 発表の為の方法についての学習や指導をきちんすべきであった。(声量・資料の使い方、発表の手順など)
- ・ 図書や展示パネルなどの出来合いの資料にたよりがちである。自分の身近な人から聞き取りする等の埋もれている生の資料を自分たちで掘り起こすことが、よりすばらしい調査であることを理解させる必要がある。

4 教育プログラムの成果と課題

今回実施した教育プログラムの成果と課題について、以下それぞれ個別にまとめる。

(1) 展示解説ボランティア養成プログラムについて

当博物館での解説ボランティアは平成5年より導入され今年度で8年目になります。

これまでにも、事前の打ち合わせや要請があったときには展示解説をおこなったきた。

成果として

- ① 今回は、全米日系人博物館及び同館のボランティアスタッフの協力を得て、特別展の趣旨、展示構成への学習会の実施したこと。
- ② ハンズ・オンを取り入れた体験型の展示解説の学習会の開催と、それを受けたの実践ができたこと。
- ③ 展示評価科学研究所の協力を得ての「来館者の行動追跡調査」の方法を学び、実際に調査をすることができたこと。
- ④ 来館者行動調査の結果から、2階への導線上の問題から1階のみの展示であるとの間違った認識があることが発見することができ、導線上の改善ができたこと。

課題として

- ① 博物館のスタッフの1員として、「来館者の行動追跡調査」の方法を活用しての実践的な活動ができなかつたこと。
- ② 今回の展示解説へのボランティアスタッフの参加者に偏りがあったこと。

(2) 展示オリエンテーションプログラム、(博物館スタディツアー)について

博物館スタディツアーとして11月5日（日）に開催をした。事前に沖縄本島内の全小中学校へ特別展のポスターと共に案内チラシの配布とマスコミ向けの事前の報道依頼をおこなった。

成果として

- ① 参加者は少なかつたが、博物館が教師向けの「展示会の学習会」を実施してくれたことに参加者の教師からの良い評価を得たこと。
- ② 沖縄県小学校社会科教育研究会に協力団体として依頼をすることことができたこと。
- ③ 博物館スタディツアーに参加した中学校教師が、今回の特別展を「総合的な学習の時間」に位置づけて参加してくれたこと。

課題として

- ① 学校現場の忙しい時期の日曜日の開催でしたので、参加者する先生方がすくなかったこと。先生方への「博物館利用への研修会」の開催を各教育事務所や関係団体と協力して行う必要があること。
- ② 現場の先生との相互交流等によって、先生方の要望にあったプログラムの立案

(3) 博物館見学を伴う教育プログラムについて

今回の教育プログラムには、那覇市立城東小学校の6学年、那覇市立久場川児童館、那覇市立大名児童館の協力を得て実施することができた。

成果として

- ① 那覇市立城東小学校の6学年とは、博物館の有するさまざまな機能を、小・中・高等学校における「総合的な学習の時間」の活用例としてのプログラムの開発ができたこと。
- ② 那覇市立久場川児童館とは、沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「沖縄県総合学習」の場としての活用が図られたこと。
- ③ 那覇市立大名児童館とは、特別展「日系移民1世紀」の見学のための学習プログラムの開発と実施ができたこと。
- ④ 博物館スタディツアーに参加した中学校教師が、今回の特別展を「総合的な学習の時間」に位置づけて参加してくれたこと。

課題として

- ① 今回の教育プログラムへの参加協力については、特別展開催4ヶ月前からからの打診であったので協力をしてくれる関係機関との調整が難しかった。次回からは、次年度の行事を決定する段階から教育プログラム参加校についての事前調整する必要がある。
- ② 教育プログラムの実施について、担当者個人のみになってしまった。次回からは複数のスタッフを配置する必要がある。

5 おわりに

教育プログラム実施の背景には、博物館そのものが学校の教室の一部として捉えられる米国流の考え方があり、共催団体である全米日系人博物館の先進的な教育プログラムの実践経験と指導・協力のおかげである。

今日、博物館の活動は「見る展示 → 見る展示、見る展示 → 触れる展示、館内展示 → 館外展示」へと大きく変化している。この変化を受け今回の関連催事の「基調講演・シンポジウム」も、博物館活動の未来を展望した内容の構成となつた。

今回の試みが、今後、地域や多くの社会・教育団体との協力・連携して、博物館がより一層地域に親しまれ・利用されるための活動の契機になったと確信した。また、多くの関係者の皆さん方がこの特別展を観覧し、体験キッドなど米国流の展示活動に参画され、今回の教育プログラムに対してもご理解いただき、今後の博物館活動への課題や指針を下されたことに感謝します。また今回の企画に、多大なご協力をいただいた関係各機関に謝意を表します。